

## 「母児同室が妊娠分娩に及ぼす効果」

分担研究：妊産婦の精神面支援とその効果に関する研究

鹿児島市立病院周産期医療センター

研究協力者 鮫 島 浩

### 要約：

母児同室に対する意識調査を妊娠36週以降の妊婦と分娩後5日の褥婦に行い、母児同室を経験する前後の意識の変化を、経産婦と初産婦とに分けて分析した。その結果、母児同室は新生児にとって良いことであるという意識をほぼ前例が持っていることが判明した。一方、母体にとっては、約87%のみが良いことであると考えていた。母体に対する意識は、実際に母児同室を経験すると変化し、母体にとって良いとする頻度は初産婦では低下し、経産婦では増加した。このようなhospital-baseの実態をふまえて、母児同室に対する医療的、精神的支援を行うことの意義について考察を加えた。

### 見出し後

母児同室、精神面支援、Hospital-base、意識調査、妊娠分娩経過

### 研究方法

対象は1993年10月から12月までに、鹿児島市立病院周産期医療センターで妊娠あるいは分娩管理を行った延べ163例である。母児同室を経験する前後での産褥婦の精神状態と、母児同室に対する意識調査をする目的で、妊娠36週以降の妊婦89例と、分娩後5日目の褥婦74例にアンケート調査を行った。褥婦の74例は全員正期産経膈分娩であり、新生児にも病的所見を認めず、母児同室を経験した後、退院時にアンケート調査を行った。また、妊婦と褥婦は別々であり、経時的な変化を観察できた症例はなかった。

対象の背景として、全例妊娠中から当センターで妊娠管理を受けており、助産婦と医師による母親学級も受講していた。しかしながら、母児同室の制度や体制、母児同室の実態、あるいは母児同室時の看護側からの援助体制に関する十分な説明は受けていなかった。

母児同室は分娩後24時間以内に開始し、退院まで終日、母親のベッドサイドで行った。新生児の観察は主に母親であり、1日1回の沐浴時に助産婦が体重測定等

の観察を行った。

アンケート調査は無記名とし、以下の4項目に関して1)はい、2)いいえ、3)その他の3選択肢からの選択方式とした。

- 1)母児同室を知っていましたか？
- 2)母児同室は赤ちゃんにとって良いと思いますか？
- 3)母児同室は母親にとって良いと思いますか？
- 4)母児同室に不安がありますか？

アンケート調査の結果は分娩前後で比較するとともに、初産婦と経産婦とでも比較検討した。

### 結 果

#### 1. 妊婦(89例)のアンケート結果

89例の内訳は、初産婦51例、経産婦38例であった。

(表1)妊婦のアンケート結果

“はい”と答えた症例の頻度(%)

	合計(89例)	初産婦(51例)	経産婦(37例)
質問 1	94.4	92.2	100
質問 2	96.6	94.1	100
質問 3	97.6	96	75.7
質問 4	15.7	17.6	13.5

母児同室に関しては、初産婦の約92%、経産婦の100%が概念として知っていた。母児同室が新生児にとって“良い”と思っているのは、初産婦の94%、経産婦の100%であるに対し、母体にとって“良い”と思っているのは、初産婦の96%、経産婦の75%であった。経産婦では、母児同室は新生児には良いと思いつつも、前回の経験をもとに母体にとってはあまり良くないと思っている現状が示された。また、母児同室に対する漠然とした不安も約16%に認められた。

#### 2. 褥婦(74例)のアンケート結果

74例の内訳は、初産婦44例、経産婦29例であった。

(表2) 褥婦のアンケート結果  
“はい”と答えた症例の頻度(%)

	合計(74例)	初産婦(29例)	経産婦(44例)
質問 1	97.3	96.6	97.7
質問 2	97.3	96.6	97.7
質問 3	86.5	89.7	84.1
質問 4	8.1	13.8	4.5

母児同室に関してはほとんど全例が知っていた。母児同室を約4日間経過した後では、母児同室に対する考え方にも変化が認められた。新生児にとって“良い”と思う割合は、妊娠中と同様で約97%であった。一方、母体にとって“良い”と思った割合は、初産婦では約90%と7ポイント低下するものの、経産婦では84%と9ポイント上昇した。その結果、妊娠中に認められていた経産婦と初産婦との差異は少なくなった。また、母児同室に対する漠然とした不安も、実際に母児同室を経験することで減少した。

以上のように、妊婦と褥婦との母児同室に対する意識調査の検討から、鹿児島市立病院におけるhospital baseの実態として以下の点が明かとなった。

- 1) 母児同室に関する知識は、初産、経産にかかわらず、概念として持っている。
- 2) 新生児にとって母児同室は“良い”ことであるという意識を持っている。
- 3) 母体にとって母児同室はかならずしも“良い”ことではない。この意識は妊娠中の経産婦に特徴的であった。しかし母児同室を経験するとこの意識は軽減する。
- 4) 一方、初産婦は母児同室を経験することにより、母体に対する肉体的精神的苦痛から、母児同室制は母体にとってきついものとする傾向が増加する。

## 考 察

母児同室の問題は、母性の確立、母児関係の確立、母乳保育率の上昇等の観点から研究されてきた。<sup>1)~4)</sup>これらはいずれも、母児同室を経験した後、母と子にどのような影響を及ぼすかを検討したものである。一方、今回の研究の主題は、母児同室が妊娠分娩に及ぼす影響に関してであり、本来ならば時系列が逆である。即ち、母時同室が、それを体験する以前の事象である妊娠分娩に及ぼす影響についての検討である。

したがって、本研究を具体的に実行するにあたり、まず母時同室の実態を把握し、次にその問題点に対す

る医学的、看護的、あるいは精神的支援体制に関して妊婦に十分説明することで、その後の妊娠分娩経過になんらかの影響が出るとする仮説を想定した。今回は時間的制限から、母時同室の実態に関してのみ、妊婦の意識調査を通して検討した。

今回の結果の中で特記すべき点は、母時同室は児にとっては良いことであると考えつつも、母体にとっては精神的、肉体的苦痛があるという意識をもつ妊婦が多いことである。本来、母と子は生物学的、社会的に一体の存在であり、母性の本能として児を守ろうとすると考えられている。しかしながら社会環境の向上、医療環境の変化に伴い、母親抜きでも児の安全性は確保され、一方、母と子の絆や母性に対する考え方も多様化している。その結果、分娩後はいち早く児と生活を共にし、児を守り育むためには自分の労苦は厭われないとする妊婦ばかりではなく、自分自身の休息を求めたいと考える妊婦も存在している。

一方、母児同室を実際に経験すると、母体にとって精神的、肉体的苦痛が大きいという意識を持つ頻度は、初産婦では上昇し経産婦では低下する。初産婦と経産婦の差を教育効果という観点で捉えると興味深い。即ち、初産婦の分娩前後での意識の変化を母児同室制の初期教育の効果と考えると、母児同室を説明することにより、新たな不安を生ずる可能性がある。しかしさらに教育効果を高めると経産婦が示した如く母児同室に対する不安は減少する可能性も示唆される。

本来、母と子は生物学的、社会的に一体の存在であるという概念から考えると、母児同室は良いことであり、当然妊娠分娩にも良い影響を及ぼすと推測される。しかしこの問題は実証されていない。今回の意識調査から、母児同室制に関する十分な教育と、精神面での援助を妊娠中に行うことで、妊娠分娩に積極的に取り組む姿勢がめばえるならば、妊娠分娩にも良い影響を及ぼす可能性があると推測される。

妊娠中の教育、精神面支援の効果を見るためには分娩予後に関するhospital-basedのprospective studyが必要であろう。また、妊娠分娩に対する積極的な取組を判定する精神医学的な評価を用いて、妊娠中の教育と精神面支援の効果判定を行う必要もあると考えられる。

## 文献

1. Klaus MK, Jerauld R, Kreger NC et al. Maternal attachment. Importance of the first post-partum days. N Eng J Med (1972)286:460-463.

2. 栄養問題委員会報告。母児相互作用の確立に関する実態調査。日産婦誌(1986)1949-1951.
3. 高橋悦次郎 母児同室制-実態と妊婦の意識調査。周産期医学(1983)13:2168-2175.
4. 兼子和彦 A. 母児同室異室の問題点。産婦人科の実際(1987)36:1359-1364.



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:

母児同室に対する意識調査を妊娠 36 週以降の妊婦と分娩後 5 日の褥婦に行い、母児同室を経験する前後の意識の変化を、経産婦と初産婦とに分けて分析した。その結果、母児同室は新生児にとって良いことであるという意識をほぼ前例が持っていることが判明した。一方、母体にとっては、約 87%のみが良いことであると考えていた。母体に対する意識は、実際に母児同室を経験すると変化し、母体にとって良いとする頻度は初産婦では低下し、経産婦では増加した。このような hospital-base の実態をふまえて、母児同室に対する医療的、精神的支援を行うことの意義について考察を加えた。